

# 琉球の守護神・航海神としての「弁財天」

——その重奏と変奏を薩琉関係からよむ——

木村 淳也

## はじめに——琉球における航海の祭祀

日本の南端に浮かぶ大小三六三の島々からなる沖縄県は、かつて「琉球」と呼ばれた海洋国家であった。故に、船舶による国内・外域との交流が頻繁であったことは、当然のことと理解される。しかし、船舶という交通手段は、現在でもしばしば報道がなされる通り、難破・遭難というリスクを避けて通ることができない。王府時代にはそのリスクを回避するための行動として、航海前や難船時に、その安全や無事の帰還を願う儀礼・祭祀が頻繁に行われていた。

例えば、唐へ進貢する船の出発前には、国王自らが参詣してその無事を祈る。祈願対象となる場所は、末吉宮、識名観音堂、普天間宮、弁財嶽、弁財天堂などの聖所であったことが、豊見山和行の指摘から窺える<sup>1)</sup>。しかし、その願いも虚しく、不幸にして難船してしまった場合、彼らはいかように対処したのであろうか。

【資料1】宮良当宗『頭役被仰付候以来日記』（一八九四年七月四日）

今日漸々風波猛敷吹起終に大風吹出火輪船火焼方も不相叶風俣漂着嶋影も不相見へ十方を失候付道そいつ地とも着岩いたし候方に御守護被為在度普天満権現并観音堂沖之寺波上寺四御前へ向御立願仕候折猶々風雨猛敷終に大風相成船體表左右之厠并中等之家我々相住居候所波に被打破及

危船萬死一生之涯立至りそのひやん御嶽弁財天弁之御嶽住吉めい之しんへ御立願仕猶又髪を切海上へ祭上聞得大君御殿へ龍樋之御水上度と之御立願仕積入荷物打捨漸々風波靜相成翌四日夜二更之比にても候半向に嶋影相見へ候：（後略<sup>2)</sup>）

資料1は一八九七年、八重山の頭役であった宮良当宗の日記である。宮良は石垣から那覇へ向かう途次、大時化で難船してしまうのだが、これを見ると難船時に船上でどのような祭祀を行ったのかが解る。まず1、普天間権現、首里観音堂、沖寺、波上社の四カ所へ立願、2、首里・園比屋武御嶽、弁才天堂、弁ケ嶽、住吉、めい之しん、といった拝所への立願、3、髪を毛を切つて海上に祭る、4、聞得大君御殿へ首里城の龍樋の水を献上するとの立願、5、積み荷を船の外へ投げ捨てる、というのが祭祀の順番だったようである。

ところで前掲4として挙がる聞得大君だが、これは琉球の最高神女（官僚的巫女組織のトップ）のことで、国家安寧や航海安全等を神に祈願した巫女的存在であった。しかし一方で、水難事故における祈願対象であり、幸いにして死を免れた琉球、大和の船頭らは、聞得大君御殿に龍樋の水や青銅などを捧げて結願したという<sup>3)</sup>。つまり聞得大君自身が「航海守護神」そのものとして見做され、琉球海域を航海する船頭達から信仰をあつめたのである。聞得大君が現人神化するその背景には、琉球の基

層的信仰である「をなり神」信仰の存在が指摘できる。琉球では兄弟から姉妹を指して「ヲナリ」、姉妹から兄弟を指して「エケリ」といい、姉妹は兄弟に対して霊的な守護力を有するとされた。例えば『おもしろうし』巻一三は「船多のおもろ御さうし」という節名が付いており、船上で謡われた歌謡を収載したもので、「多」とは労働作業の時に唱和する掛け声のこと<sup>(4)</sup>、その九六五番歌「一吾がおなり御神の／守らて、おわちやむ／やれ 多け／又弟（おと）おなり御神の／又綾蝶 成りよわちへ／又奇せ蝶 成りよわちへ」は、私の姉妹の魂が蝶に化して船上の兄弟を守護してくれている、ということを謡ったものと理解できる。

琉球・沖縄では、そのような基層信仰の上に様々な神が重層化している。その一つが、現在も中国・福建省を中心として幅広く信仰をあつめる「媽祖」である。琉球において媽祖の信仰は根強く、航海の安全祈願に際しては媽祖を祀る久米村の天妃廟に参詣し、渡唐や江戸立の船には「船菩薩」と称された媽祖像が積載された。また、媽祖が「船菩薩」と言われることから解るとおり、ここに観音菩薩の信仰も重層化している。観音の航海神化は、浙江省の舟山群島内に位置する観音の一大霊場・普陀山の信仰に由来しており、清代においては、媽祖の本拠である福建の湄州島と同様、近隣の漁船や商船が立ち寄って航海安全を祈願する聖地であった。琉球における基層信仰と媽祖・観音の習合、重層化の詳細に関しては、東アジア海域における信仰体系の問題が絡んでおり、先に指摘した豊見山論をはじめ、重要な先行研究があるので参照されたい。<sup>(5)</sup>

### 1、航海守護神としての弁財天

ところで、資料1を見ると、今まで挙げてきた聞得大君や媽祖、観音以外にも、航海安全の祈願対象として弁財天や住吉神、「めい之しん」といった神の姿がみえる。住吉神は、すでに『古事記』の神功皇后記に

みえる航海神であり、特に説明の必要はないと思われるが、弁財天と「めい之しん」に関しては少々解説がいるだろう。

まず「めい之しん」について検討してみたい。これは那覇市の南部の鏡水（現・自衛隊那覇駐屯地の内部）に所在する聖所「箕隅御嶽（ミーヌシン）」のことで、前後二つの洞窟を本殿としており、旅の加護・子安を祈願した拝所であった。<sup>(6)</sup>『遺老説伝』（一七四五頃）には以下のような伝承がみつかると。

#### 【資料2】『遺老説伝』附卷 第一三九話

小祿郡、儀間邑の西に、一山崗有り。巽然高秀、樹木最茂す。下に洞窟有り。形箕器に似て、深闊幽雅にして神の在るがごとし。一日、人有り、正観音像を其の中に奉り、以て尊信致す。至聖至靈にして、禱りて應ぜざる無し。近世至り、日本諸舵工、資金を喜損し、拜殿を創造す。且つ復た一洞有り、亦た賓頭盧を供養す。今、人の崇信有ること無し。

この御嶽はもともと那覇港の入り口近くに所在し、ラクダ山との異称があるように<sup>(7)</sup>、その形状から航海の目印となった場所と考えられる。この説話において観音像の奉祀が説かれることは、御嶽の信仰に、航海守護神としての観音が重層したものと理解できよう。

#### 【資料3】『八社縁起由来』（抜粋）

箕隅弁財天社 祭神、市杵嶋姫命、十五王子  
弁財天社。硫磺城 祭神、市杵嶋姫命、十五王子  
弁財天社。中渡地 祭神、市杵嶋姫命、十五王子

しかし明治初期に記された『八社縁起由来』（資料3）を見ると、不

思議なことに、この御嶽の祭神が弁財天として理解されているのである。また同書には硫黄城にも弁財天社があると記されるが、『琉球国由来記』(一七二三年)「硫磺城ウガミノ事」をみると「右囲ノ内、御嶽有。所ノ人、且、薩府ヨリ御米積ニ来ル船頭、水主、勸進ニテ、康熙廿五丙寅(一六八六)拜殿、同三十三甲戌(一六九四)ニ御嶽ノ門ヲ再建立ス。…」とあって、当該御嶽の祭神が、当時は弁財天とは理解されていなかったことがわかる。ここで興味深いのは、硫黄城の御嶽の拜殿や門が一七世紀末に薩摩の船頭らによって再建されていることである。これはもちろん、大和の船頭らが、硫黄城御嶽を航海守護の神と見なしたからこそなされたものであるが、これは祭神の弁財天へ変化と関係するのであるうか。本稿で考えてみたい問題である。また一方、渡地の弁財天に関しては資料不足のため詳らかではない。しかし、この地域は那覇の港湾近くにあった集落であるので、これも航海守護の力を期待して建立されたものと一応は理解されよう。

そもそも、先ほどから述べている「弁才(財)天」とは一体どのような神なのであろうか。先行研究に寄り添いながら、簡単に解説してみたい。この神は、インド土着の川の神・ Sarasvatee<sup>(9)</sup> が様々な習合を繰り返し、豊穰・弁舌・学問・知恵・音楽の女神となり、さらに仏教へ取り込まれて生まれた存在である。弁才天の日本への流入は奈良朝頃と言われている。当時の造形は二通りあって、八臂像は八本の手に武器を執る形像で、勝軍の祈りの対象となっていた。一方で、二臂の琵琶を弾く形像は、知恵・弁才・音楽の祈願対象である、我々もよく知るところの「妙音弁才天」である。しかし、平安末期になると、「弁才天五部経」(偽経)によって、この弁才天が、とぐるを巻いた蛇体に、老人の首をのせた穀物神・宇賀神と習合して、「宇賀弁財天」というものに変化してゆく。この宇賀弁財天は院政期に成熟し、福德を掌る神として中

世を通して活躍していった。またこの宇賀弁財天とは、山本ひろ子によれば、荒神とも関係が深かったという<sup>(10)</sup>。荒神は福德を奪う祟り神的性格をもつものだが、「利益を奪う」ということは、「利益操作をする」ということにも解釈できるので、妨碍神かつ福德神という両義的性格を持ちうることになる。また宇賀神・荒神の性格を一身に併せ持つ神として、十禅師というものも存在し、これらが渾然となり、天地を融合し、一体とする働きをもった神として習合していったと思われる。

しかし、なぜこの弁財天が、琉球では航海守護の神となり得るのだろうか。確かに日本においては、弁財天は水と関係が深い神として理解されており、宗像三女神・市杵嶋姫との習合、垂迹の例がしばしば見られる。また、航海安全を福德の一種と考えれば、辻褄が合わないこともない。しかし、琉球の弁財天とは、そのような日本の信仰の延長線上で考え得るものなのだろうか。琉球において弁財天がどのようなものと理解され受容されたのか、以下関連テキストを取り上げながら、これを考えてゆきたい。

## 2、琉球を守護する神々

### ——『琉球神道記』から「冊封使録」へ

琉球関連テキストにおける「弁財天」言説の嚆矢は、一六〇三年から約三年間、琉球に逗留した浄土僧・袋中良定の『琉球神道記』である。

【資料4】『琉球神道記』巻五 キンマモン事 (■は梵字)

又、一紀一回ノ荒神、亦二七日ヲ期トス。國ニ惡心貶毀ノ者アレバ。必是ヲ刑罰ス。誹謗ノ者ヲバ口ヲ裂。惡心ハ胸ヲ切。執モ押ザル女性等。鉦戟ノフルマヒ猶勇シ。所作ノ惡業、一一二語ニ宣テ、責給フ。當人諍ベキ様ナシ。若、遠嶋ノ者ヲバ、早舟シテ呼メス。或ハ又、惡心ノ者、常ニ毒蛇ノ攻アリ。信者ハ見ルコトナシ。況ヤ傷害ヲヤ。託女三十三人

ハ皆以王家也。妃モ其一ツナリ。聞補君ヲ長トス。都テ君ト稱ス。此外  
・夷中邊土ノ託女ハ、數モ定ナシ。家ヲモ起ズ。■(キンマモン)ニ  
・陰陽ノ二神アリ。天ヨリ下給フ。■(ギライカナイ)ノ■(キン  
マモン)ト稱ス。海ヨリ上給夫フヲ。■(オボツカグラ)ノ■(キ  
ンマモン)ト稱ス。都テ辨才天ナリ。

琉球の独自の神道を説明した巻五の「キンマモン事」という項目をみると、罪人に刑罰を下す「荒神」という存在が記されている。また後半には陰陽二神の「キンマモン」について説明がある。このキンマモン(君真物)とは、聞得大君をはじめとする神女によりつく神で、琉球神道の最高神という位置づけがなされているが、袋中はこれらを「都テ辨才天ナリ」と記している。渡辺匡一の指摘に従えば、袋中はキンマモンが竜宮(ニライ・カナイ)より訪れる龍蛇の神であることから、これを宇賀弁財天に解釈したのだと思われる。『琉球神道記』の意図するところに關しては、島村幸一がすでに述べているように、琉球の神祇が真言密教と深く関係しており、琉球における神仏習合と本地垂迹を説こうとしたものと言えるだろう。

また、琉球国王を冊封するために中国から派遣された冊封使らは、帰国後に『冊封使録』を記し、自らの見聞と業績を報告するのが通例となっているが、その中のいくつかには、「琉球の守護神」について報告・解釈した記述が存在している。これを年代順に取り上げ検討してみたい。

【資料5】陳侃『使琉球録』(一五三四年)

俗畏神。神皆以婦人為尸、凡經二夫者、則不之尸矣。王府有事、則哨聚而來。王率世子及陪臣、皆頓首百拜。所以然者、以國人、凡欲謀為不善、神即夜以告就擒之。聞、昔倭寇有、欲謀害中山王者、神即禁錮其舟、易

而水為鹽、易而米為砂。訪就戮矣。為其守護斯土。是以國王敬之、而國人畏之也。尸婦、名女君、首從動經三百人、各戴草捲携樹枝、有乘騎者、有從行者、入王宮中以遊戲。一唱百和、聲音悲慘、來去不時。

【資料6】夏子陽『使琉球録』(一六〇六)「群書質異」

國中敬神。神有女王者。乃王宗姊妹之属世由神選以相代。選時、神附之言、送女王宮、遂倏然靈異。雖適配者、亦不再合焉。惟国当梓播種、先一日、王詣其宮拜竈、女王以酒觴之余亦不相見也。五穀成時、女王必渡海、至孔達佳山、採成熟者數穗嚼之、各山乃敢穫。若女王未嘗、而先穫者食之、立斃。故盜採之奸、不禁自息。聞、昔倭來寇、神輒、化其米為沙、其水為鹽。或時人忽為盲啞、而舟倏為崩裂、倭反見困詳去

【資料7】江楫『使琉球雜録』(一六八四年)卷三

伝聞、国祀六臂女神。手執日月、名曰辨戈天。靈異特著。以婦人不二夫者為尸、尸名女君。王及世子陪臣、莫不稽首致敬。国有不良、神輒告王擒之。隣寇來侵、神、易水為鹽、化米為沙。尋即解去。故国人、事神甚謹。明有使臣、至国、与王談讌頗洽。因問王曰、国無城郭、少兵甲。何以禦外侮。王備言、女神之靈。曰、可恃以無恐也。使臣曰、脱神偶不靈、則將何恃。其後、倭忽大至、殺掠甚慘。執王及王相以去、久之始釈。王曰、神之靈、遂為天使一言、敗之乎。嗣是、不復以辨戈天為言。所過寺院、亦未見有祀之者。

【資料8】周焯『琉球国志略』(一七五九年)「祠廟」・善興寺項目

仏堂供不動王并三首六臂天孫神

【資料9】李鼎元『使琉球記』(一八〇二)嘉慶五年九月二十九日条

往遊辨才廟。廟荒落、供弁財天女。通事云、神昔靈異特著、号弁戈天、能易水為鹽、化米為沙、以禦外患。經某天使一言、敗之遂不靈、後改称辨才天女。然国人、至今猶崇祀、惟謹。或曰、即天孫女、又曰即君君、天孫氏之長女也。

まず資料5、一五三四年の陳侃『使琉球録』だが、神は女性である「尸（よりました）」に懸かるものであり、その「尸」は「女君」という名で、王府の祭祀を取り仕切る存在である、とされている。また神の靈力としては、不善を告げる、倭寇に対して水を潮に、米を砂に変えるというような『中山世鑑』と類同する文章が見える。次に資料6、一六〇六年の夏子陽『使琉球録』を見ると、神は女王であり、王室の姉妹が選ばれる、との認識があり、神の靈力に關しての言及は陳侃録と類同したものといえる。やや時代が下るが、次に一六八四年の汪楫『使琉球雜録』（資料7）を見てみたい。前代の冊封使録を踏襲しながらも、国家祭祀の神として「辨戈天」という六臂の神が挙げられているところに独自性をみることが出来る。おそらくこれは「弁才天」の誤りであると思われるのだが、この文章に引き続きいて女君の祭祀が記されている部分を考え併せると、女君の祭祀対象として「辨戈天」に繋がりを持たせる意図があるように思える。またここでも、異朝の賊を退ける神の異能として、前代の冊封使録と同様の記述が見える。これが、一七五九年の周煌『琉球国志略』（資料8）になると、三首六臂の神は「天孫神」となり、さらに一八〇二年、李鼎元『使琉球記』（資料9）においては、「弁財天」とは国人が崇敬する神で「天孫女」あるいは「君君」と呼称され、琉球開闢に際し現れた天孫氏の長女である、と明示されるようになる。

これら冊封使録における、琉球の守護神に關する言説を年代順に並べてみると、夏子陽録（一六〇六年）と汪楫録（一六八四年）の間の約八

〇年で、琉球の守護神⇨弁財天という構図が成立していると言える。冊封使録の執筆においては、もちろん冊封使自身の独自解釈も混在しているだろうが、基本的には王府官人たちからの聞き取りが大きなウエイトを占めたと考えられる。そのため、「弁財天⇨琉球の守護神」という認識は、王府官人層の意識変化に連動していると考えてよいのではないか。

### 3、王府テキストに現れた「弁財天」

『琉球神道記』において、弁才（財）天と解釈された琉球の守護神は、さらに冊封使らの記録において「弁才（財）天⇨天孫神（シネリキユ・アマミキユの長女・君君）」というように、一段階進んだような構図をとるようになった。ここで、琉球王府自身における自国の神（守護神）の認識を考えてみたい。

#### 【資料10】『中山世鑑』卷一「琉球開闢之事」

曩昔、天城ニ、阿摩美久ト云神、御坐シケリ。天帝是ヲ召レ、宣ケルハ、此下ニ、神ノ可住靈処アリ去レドモ、未ダ島ト不成事コソ、クヤシケレ爾降りテ、島ヲ可作トゾ、下知シ給ケル。：（中略）天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。二人、陰陽和合ハ無レドモ、居処、並ガ故ニ、往来ノ風ヲ縁シテ、女神胎給、遂ニ三男ニ女ヲゾ、生給。長男ハ国ノ主ノ始也。是ヲ天孫氏ト号ス。二男ハ諸候ノ始。三男ハ百姓ノ始。一女ハ君々ノ始。二女ハ祝々ノ始也。：守護ノ神モ現ジ給。キミマモントゾ、称シ奉ル。キミマモント申スニ、陰陽ノ二神アリ。ヲボツカグラノ神ト申スハ、天神也。ギリイカナイノ神ト申スハ、海神也。：新懸神ト申ハ、海神也。五年・七年ニ、一度ノ出現ナリ。公卿・大夫・師長ニ到ルマデ、心スナヲニ、敬信アル者ノ家々ハ、来梳有テ、寿ヲシ給ヘケルヤ、心奢修有テ、邪詭ナル者ノ家ニハ、至リ給ハズ。剩へ、尋常ノ悪行ヲ、具ニ宣給テ、

刑罰ヲ加へ給。…荒神ト申スハ、海神也。是ハ、世澆季ニ及ビ、不仁乱逆ノ者共、出来ル時、三十年ヤ五十年ニ、一度現給テ、刑罰ヲ行テ、使諸枉者直。…密ニ念ニ、往古ハ人ノ心モ、皆信実無妄ニシテ、専ラ如左ノ誠敬ノミナルニヤ、異朝ノ賊船、襲来レバ、或ハ大風ヲ吹セ、或ハ水ノ潮ト成、米ノ砂ト成テ、敵ヲ拒グニ、便有トカヤ。…

琉球史書の嚆矢である『中山世鑑』(一六五〇)には、昔アマミク(あるいはアマミキヨ)という神が天帝の命により国作りを行ったが、人種が無かったため、天帝の子三男二女が下界に下され、そのうち長女は「君々」の始めとなったとある。「君」とは高級神女のこと、聞得大君や高級神女に繋がる祖先神的存在として理解されているといえる。また同時に守護の神も出現するが、これは『琉球神道記』の理解と同様、不善の者を告げ知らせ、刑罰を与える存在と認識されている。琉球の開闢や神の説明に関しては、後代の『中山世譜』(一七二四)、『球陽』(一七四三)でも基本的に『中山世鑑』を踏襲しており、大枠に変化はない。また後段二行を見ると、その昔、人々の心が素直な時代には神が出現したが、これは異朝の賊船が襲来すると大風を吹かせ、水を潮(塩水)に、米を砂に変えてこれを防ぐという異能を示す存在とされている。しかし、これらを見れば、王府の公的な言説空間においては、キンマモン(琉球の守護神)は「弁財天」である、というような認識は存在していないことが言える。ただ、一つ気になるのは、次に掲げる『球陽』の記事である。

【資料11】『球陽』巻一「琉球開闢」

遺老伝に記す、往昔の世、人心篤実なれば、神常に之れが為に護衛し、感有れば必ず応ず。間々海寇の来侵する有れば、則ち神、輒ち其の米を

化して沙と為し、其の水を鹹と為す。或いは冠賊をして盲啞と為らしむ。忽然として颶風遽かに起り、舟皆沈覆し崩裂すと。後世に至り、人心機巧にして祭に臨みて懈怠す。故に護衛の神、復常には見はれずと爾云ふ(託遊の俗、伝へて尚豊王の世に至るまで尚存する有り)。

前掲『中山世鑑』本文の後半二行を踏襲した記事といえるが、割注(括弧部)は『球陽』によって付された独自の記述である。これを見ると、尚豊王の時代である一六一一〜一六四〇年までは、神が託遊することがあったと伝承されている、とある。逆に言えば、この時代を境界線として、琉球の守護神に一つの画期があったということではなからうか。この点に関しては以下で考えてゆくこととする。

次に、『球陽』を基本テキストとしながら、王府の記述に現れた弁財天の足跡を追ってみた。

【資料12】『球陽』附巻一 尚質王一〇年(一六五七)

馬国隆(国頭王子正則)、西森巖部の前に於て、拜殿を創建し、弁才天女(中国の斗姥又は宇賀神将と称し、又は斗母君と叫ぶ)を供奉す。而して昼夜、此に至り、焚香祭酒、以て太守光久公の洪福を祈る。

まず注目されるのは、一六五七年に、国頭正則(馬国隆)が西森巖部に拜殿を創建し、「弁才天女」を供奉したという記事である。国頭正則は、一六四三年に尚賢王即位の謝恩使、一六五三年に將軍徳川家綱襲封の慶賀使を務めた琉球王府の重臣であり、島津氏に年頭を寿ぐ使者などもしばしば務めた事で知られる。この間に島津家当主・光久の信を得たようで、三司官の証人制度の免除など、王府の訴えを認めさせる功をあげているという<sup>15)</sup>。その正則が将来した「弁才天女」であるが、これは宇

賀弁財天であったことが冒頭の一文で明白となる。そして、最後の一文では、この弁財天の供奉は、島津光久の洪福を祈るためである、とされている。また正則の妻は金武王子朝貞の娘で、のち『傳姓池原家譜』等によると康熙初（一六六一）頃）に聞得大君になった人物である点は興味深い<sup>14</sup>。この点も後段で検討したい。

【資料13】『球陽』巻七 尚貞王十三年（一六八一）

始めて、毎年正・五・九月間、吉且を拵び得て、聖主、識名社・観音堂に幸行するの時、亦弁財天亭に幸して以て国土の泰平を祈ることに定む。

資料13をみると、一六八一年には、弁財天堂（亭）において国土安寧を祈る国王行幸が規式化されたとある。これは琉球の弁財天信仰にとつて大きな画期といえるだろう。

【資料14】『球陽』附卷二 尚貞王十九年（一六八七）

唐榮の東に一山林有り。山高からずして秀雅、林大ならずして茂蔚す。而して其の神は、弁財天女（中国の斗姥）と曰ふ。至聖至靈にして持りて応せざる無し。：（中略）：万歴年間（一五七三～一六一九）、日本山城国の人、重温なる者有り。琉球に雲遊し、其の神に許願す。数日を閲せざるに、塗に一婦女に遇ひて炉を買ふ。価は但数銭なり。而して家に回りに之れを觀れば、即ち黄冠金なり。重温、旧に依りて以て還さんと欲し、更に携へて出づ。果して其の婦女に遇ふ。婦女曰く、吾は乃ち弁財天女なり。汝の志、嘉すべし。故に特に之れを送ると。遂に清風に化して去る。此れに因りて、重温、宮を其の森の東に建て、以て便ち恩を謝し名づけて内金宮と曰ふ。後亦、秀昌・重次等継ぎて拝殿を建つ。今に至り鶴城の使者は必ず石燈を豎て、或いは資金を發して、宮殿を修

葺す。是の年、東竜寺の住僧盛海、宮殿を改修して以て堅牢を為す。亦神像を請安して、以て祭祀に便す。

さらに資料14、一六八七年の記述をみると、万歴年間に山城の重温が琉球で弁財天に出会い、これを奉祀するため唐榮（久米村）の東に内金宮を建立した、とある。注目すべきは、後段で「鶴城」、すなわち鹿児島藩の使者が必ず石燈を寄進したり、宮の改修工事を行うために資金を提供したりする、ということが説かれている点である。「今に至り」というのであるから、一六八七年前後には慣例となっていた、ということだろう。以上の点を踏まえれば、弁財天に関連する記事は薩摩との政治的・文化的連関が濃厚であると言えそうである。

【資料15】『琉球国由来記』巻一〇 始創弁財天女堂記附再修事

原、夫此地者、弘治十五年壬戌（一五〇二）之間、自從朝鮮国王、獻方冊藏經於吾朝也、始卜此地、創輪藏、以収之也。然而至于万曆三十七己酉（一六〇九）、堂亦老朽、經亦散失。而咸成空地矣。爾来至于天啓元年辛酉（一六二二）、尚豊王詔円覚住持恩叔曰。朕聞、弁才天女者、為吾朝第一之守護神也。雖然、自曩古、未曾有堂。想是於經藏之遺址、新構於一字之堂、請於弁才天女像、而欲崇敬之矣。恩叔、鞠躬奏曰。善哉大王。幸円覚方丈、素在天女之像。可請之矣。仍乃、統其地、吏工展其力、而功告畢也。是即像堂之著世權輿也。：抑又仰古像、支体分離、而不儼然。故住僧說三、奉 明旨、以至于康熙二十五年丙寅（一六八六）、請新像於扶桑也。

一方、『琉球国由来記』（資料15）には、弁財天女堂の創始と修復に関する記事がみえる。これによると、弁財天女堂のある地は、もともと朝

鮮から将来した経典類を奉安する経堂があったが、二六〇九年に突然「老朽」してしまった、とある。これは同年の薩摩侵入と関連すると言えるだろう。のち一六二一年に、尚豊王は、弁財天は琉球第一の守護神であるので、これを祀る場所を創建すべきであると述べ、この地に弁財天女堂を建立することになったという。またその後、一六八六年には円覚寺から移した弁財天女像が朽ちてしまったので、日本から新しい像を将来したともある。尚豊王の発言は、もちろん後代の人間によって編集がなされたもので、本人の発言か否かは検証不可であるが、琉球の守護神がこの時代を画期として弁財天へと変化していった、という琉球の人々の認識の発露とは言えまいか。神の託遊が尚豊王の時代以降無くなったとする、先の『球陽』の割注と交差するものとすることが可能だろう。

【資料16】 識名盛命『思出草』（一七〇〇）「弁財天女を祭奉りし」とは「此天女仏ませし世に、宇賀神王と現し給ひ、信教のものには福田をほとこし、一切の魔土をしりそけ、二世の願をみたし、怨敵をたいらけ、愛敬をえせしめ給はん、との御誓ひをなし給ふ。久遠のむかしは、正法明如来と号して佛法擁護のため、衆生の貧を転し、福をさつけ給ひ、また南方にましくては無量寿仏と号し、娑婆の世界にては、女意輪観音となん。きこへしか、れはこそ、わかうるまにも、出給ひて、国を鎮護し、ひやうふの嶽、へにの嶽てふ二ツの御山に跡をたれ給ひ、信心ふかき輩には、今も現形しおかまれ給ふとなん。その御かたちを、王城の久慶門のあなたの御池なる、中島にあかめ奉り給ひて、世々の君、陸月、皐月、長月に三度のみゆきあり。是を三季の行幸と申。されは、上をまなぶ下の習ひ、遠き島人まで、帰依満仰し奉らぬはなかりき。かゝる御神の守りにや、わか君の御末葉さかへ、国ゆたかに、民やすくして、からの、大和の、舟路おたやかに、みつつき物時たかはす、五のたたつ物みのり吹

風も静なるらしなと、法の師の談義めきていへは、人々うなつき、信おこしき。

右は、後年、三司官という要職に就任する識名盛命が、王府の年頭使として一六九六年六月から翌年一〇月の任期を終えて薩摩から帰国するまでの、一年あまりの見聞や出来事を記した紀行文『思出草』の一部である。<sup>15</sup>「信教のものには」以下の文章は、弁財天五部経によったものと推察されるが、<sup>16</sup>弁財天が福を授け、怨敵を平らげる、という琉球の守護神と類同する性格をもった存在であることが説かれたのち、我が「うるま」、つまり琉球の「ひやうふの嶽」「へにの嶽」の二所に跡を垂れたのだ、と述べる。「ひやうふの嶽」とは首里城守礼門の後方にあつて、国王出御のときなど重要な儀式に祈願したといわれる拝所「園比屋武御嶽」「へにの嶽」は首里城域の東端・首里汀良町に位置し、久高島、斎場御嶽への遙拝所がある「弁ヶ嶽」をそれぞれ指しており、これらは国王、聞得大君を中心とする王城儀礼の中心となる至聖所であった。ここに弁財天が跡を垂れたのだというのであるから、官僚らの中には王国の守護神＝弁財天である、という認識がこの時代にはすでに存したと言つてよいのではないか。

#### 4、弁財天言説の波及

王府の公的なテキストには、琉球の守護神＝弁財天という構図は存在しなかったが、王府の官僚クラスの内には、右のように琉球の神＝弁財天という認識が現れているのである。そして、このような言説は、地方の島々にも繋がりをみせてゆく。以下、『琉球国由来記』や『球陽』作成のための資料として、地方間切から提出された「地方旧記類」の記述を見てみたい。

【資料17】『御嶽由来記』（一七〇七）「漲水御嶽」

漲水御嶽、辨才天女。首里天加那志美御前御爲、諸船海上安隱の爲、諸願二付、崇敬仕候事。

：其後經數百曆、平良内すみやと申さとに富貴榮耀の人有り。一人の子無きことを歎き、天に祈ければ、神徳感に應て、廳而花の様成娘を儲け、此娘生立に隨て優にやさしき粧ひ、譬へていふへき方なれば、高き賤しき押なへて、娘の形を見聞人、うき物思ひの種子と成て、こゝろ迷し計なり。（略）娘其夜の夢に、右の大蛇枕本に來り、我ハ是、往古此島草創の戀角の變化也。此島守護の神を立んとて、今爰に來り、汝におもひを掛申候、かならず三人の女子産みへし。其子三才にもなるならば、漲水へ抱參るへしと夢を見て、父母に語れば、あら不審成事哉。夢の告誠ならば、歎の中の祝ひなりとおもひ、生る、日をぞ待けれ。日充、月滿十ヶ月めに、一腹三人の女子を産み申候。（略）三才にも罷成候間、示現の通、漲水へ抱參申候。父の大蛇、兩眼は如日月、牙は劔を立たるやうに、紅の舌を振、御嶽の中より這出、首は藏（元）の石垣に仰き掛り、尾ハ御嶽の石垣に振掛り、喚き叫し有様おそろしき、魂も身ニも添ず、息も絶入計にて候。母も蛇の形に恐懼して、子をば抛捨去り申候。三人の若子、何こゝろもなく蛇に這掛り、一人は首に乗り、一人は腰に乗り、一人は尾に乗り、ひしと抱付。蛇も紅涙を流し、舌を以子を吸い、親子の昵をいたし候。則三人共、當島守護の神とならせ給ひたるよし、御嶽の内に飛入、搔消様にて失申候。父の大蛇ハ光を放ツ、天に登り申候。夫よりして、宮古の氏神と崇申候。：

宮古島の各拜所の創成を記した『御嶽由来記』には、宮古島随一の拜所である漲水御嶽の祭神が弁財天であり、また航海守護の神である、と

みえる。以下とどころ省略をしたが、中盤はいわゆる三輪山型説話で、宮古の創世神かつ蛇神である恋角が、島の娘に夜這いしませた三人の女子が、その後、御嶽の神として示現するという展開をとっている。蛇神を奉斎する巫女神、という構図で語られていることから、この神が（宇賀）弁財天と解釈されるのは理解できよう。さらに三女神という取り合わせからは、「三面六臂」の神へと繋がる思考の道筋も見えてくるのではなからうか。

また、この三人姉妹の神という部分と関連して、直接的には弁財天を指示する文言はないが、弁ヶ嶽に降臨した弁財天と関わるような言説が地方旧記には見える。

【資料18】『君南風由来并位階且公事』（一七〇五）

昔、神代之時ニ、姉妹御三人女あり。御姉ハ、首里弁嶽に御住居、御兩人ハ久米嶋御渡海、御住居を御分たまふ。御姉ハ東嶽御妹ハ西嶽御住居被成候処、御姉ハ八重山嶋御渡海、おもと嶽ニ御住居為被成由候。御妹ハ西嶽ニ御安堵、君南風為被成由候。：

【資料19】『八重山嶽々由来記』（一七〇五）「天川御嶽・名藏御嶽・水瀬御嶽」

右三御嶽立始由來、昔名藏といふ所ニ、はつかね、玉さら兄弟、妹おなりと申て居ける中ニ、はつかね邪心強力のものにて、大二驕。折節、世間を御守護としておもとおなりニ乗移、御めしすりニ、姉妹御三人、大和■（ヨリ）おきかなかし江御渡、姉神ハ首里辨の御嶽ニ御住居御分、

妹神ハ、御兩人ハ久米嶋江御渡、御住居御分、兩山御住居被成候處、二の妹御神御住居山ハ、姉御神御住居拾（給）ふ山■（ヨリ）卑二付、家住山ニあらすとて、八重山嶋江御移、おもと嶽といふ高山に御安堵、神

おほあるじと世間敬候。…當嶋、神始、是也と傳來候事。

資料18は久米島の最高神女・君南風の由来を語った『君南風由来并位階且公事』である。神代に三人姉妹の女神がおり、長女は弁ヶ嶽、二女は八重山・於茂登岳、三女は久米島・西岳にそれぞれ垂臨した。そのうちの久米島西岳の女神が、君南風の祖先神として説明されるのである。

さらに八重山から提出された『八重山嶽々由来記』（資料19）に至っては、この三人姉妹の神は、大和から琉球に渡来したのだと述べる。本文では省略したが、この八重山の神の力をみると、大猪、大鯖を出現させるという豊穡の招来能力と、シラミを集らせ人を殺す能力とを同時に持っているという。つまり信奉者には福をもたらし、不信の者には不幸をもたらす禍福両義的な神であり、王府のテキストで語られた琉球の守護神と同様の力を持った存在とみられる。また同時に、それは宇賀弁財天へも置換しうる能力であるとも言い得よう。さらに、この八重山の神とは、島第一の神であるオモトオオアルジであり、同時にこの神をもつて八重山の神道が始まるのだという。このような、中央と地方それぞれの至聖所の神＝最高神女を姉妹として結ぶ言説が、一八世紀初頭には地方の島々において成立していたのである。これら「地方旧記類」の成立には、王府の地方支配のための施設である「蔵元」へ派遣された王府役人が少なからず関与しており、その思想的影響は否定できないだろう。

さらに時代が下るが、一九世紀後半に記された『聞得大君御殿并御城御規式之御次第』（一八七五年）の「聞得大君御殿毎日之御たかへ」には「御抹香、おしやけらしみしやうち、聞得大君加那志前の、御願みしやうち、おしやけらしみしやいへん、御火鉢御すし加那志前、金の御すし加那志前、聞得大君加那志前、御すし御神加那志前、弁財天加那志前、古よろ御すしさい、御神さい、みしやうち、…」とあり、聞得大君

が毎日礼拝する対象として弁財天がみえる。最後の聞得大君であった野嵩御殿へ、鎌倉芳太郎が取材したところによると、やはり聞得大君御殿の拝殿には「弁財天」と呼ばれる図像が掛かっていたという。鎌倉が、月・日・鳳凰・馬に囲まれたその図像をもって「国土の祖神である母なる神の象徴」と推測しているのは興味深い<sup>(17)</sup>。

このように聞得大君が祈願する対象が、琉球国内でも次第に「弁財天」と解釈されてゆき、王府時代末期には、宗教的最高権力者である聞得大君さえも、これを祖先神的存在として享受していたのではないかと思われる。しかも、それが日本からやってきた神である、とする言説が、一八世紀初頭の地方旧記類に見えている点は重要である。このような言説空間を支える背景として、当然、当時の政治的背景を考える必要があるとくるだろう。また、弁財天は多様な神の集合体として真言密教下で生まれ、成熟したものである。故に、政治的な部分と連動した、琉球宗教界の動きも見る必要があるのではないか。

## 5、琉球仏教界・政界の動きと日秀伝承

知名定寛によれば、琉球は仏教に関して臨済宗・真言宗の二宗体制をとっており、ともに一四世紀末に伝来・定着したという<sup>(18)</sup>。この両宗派のうち、古琉球時代に特に力を持ったのは臨済宗であった。日本との交流・交易のために、王府が外交手腕に優れた禅僧を、その担当として積極的に登用したためである。しかし島津氏との関係悪化や、琉球天界寺の住持・鶴翁の発言に「彼国王毎即位。必建一寺。故多僧侶。然儒亦不学。禅亦不参。不知祖宗所由而興矣」（月舟寿桂『幻雲文集』室町後期）とみえるように、宗教者としての怠慢などもあり、徐々に衰退してゆく。そして一六〇九年の島津氏の侵入事件がきっかけとなり、臨済宗による独占的な王国との関係は終焉し、真言僧がその関係に割って入るように

なる。まず大きな変化は、一七世紀半ばに真言寺院・大日寺が首里に建立されたことである。この時まで真言寺院は那覇にしか存在しておらず、王都である首里に建立されることは、一つの大きな画期であったといえるだろう。

【資料20】『琉球国由来記』卷十一「姑射山神応寺」

開基頼慶、為人自幼敏、及弱冠、飛錫到扶桑。発心勇猛。修行精進。受密法之奥旨、極兩部之源底矣。終学儒書、帰來住東寿寺。于時兼学儒釈道、聴世。尚質尊君、詔頼慶、令講儒書。從遠路日登朝。念勤勞、順治年間（一六四四―一六六一）、賜創建大日如来堂。

首里に大日寺が建立された理由は右に明らかないように、真言僧である頼慶が、尚質王に儒教の侍講として厚遇されたからである。またこの頼慶は琉球真言宗の総本山的存在である波上・護国寺の再興に尽力した人物としても知られている。

さらに『球陽』尚貞王三年（一六七一年）条には「素より真言宗僧は権現明神を供奉し、大夫・内侍は皆波上山に属す。而して其の三寺（神応・万寿・聖現）、禪宗僧之れに住持す。是れに由りて護国寺住僧頼昌法印、具呈して懇請す。幸に兪允を蒙り、改めて真言僧寺と為す。」とあり、元來臨済宗に属していた識名宮・神応寺、末吉宮・万寿寺、天久宮・聖現寺が、護国寺の頼昌の懇請により、真言寺院へと宗旨替えされたところである。識名、末吉に関しては、冒頭に言及したように、渡唐船の出帆に際し、王自身が参詣して航海安全を祈願する寺院となっていた点は見逃せない。

ところで、この頼昌なる真言僧は、『琉球国由来記』に「尚貞聖王御宇、護国寺住頼昌法印、薩州遍参之日、会大臣羽地王子朝秀云。日本者

社宮皆密乗也。諸社之秘法、諸宗之差別、神仏之要、皆談話而帰国」とあって、薩摩遍参のおり羽地朝秀と出逢い、先の三方所の寺院の宗旨替えを説いたとある。羽地朝秀は、島津侵入により疲弊した王国を再建した大政治家であり、その政治的理念の支柱として儒教があったことはよく知られている。またその羽地を撰政として重用した尚質王は、先に見たように大日寺を首里に建立するほど頼慶を信頼していた人物である。知名が「儒教を近世王国体制の精神的価値として採用しようとする羽地朝秀と、儒教を撰取して勢力拡大を目論む真言宗側との思惑の一致があったように思われる」とするところは首肯される<sup>19)</sup>。さらに真言宗の王国への奉祀行事として、首里城内で正・五・九月の三度行われる国家護持の祈禱があるが、これは資料17にみえる弁財天堂への王の御幸とも連動しているといえる。

これら真言宗が、王府の中で次第に力をもつていったその下支えにおいて、日秀上人という僧侶が重要な役割を果たしていたのではないかと推測される。「日秀上人伝記」（『三国名勝図絵』卷之四十）や「開山日秀上人行状記」（『神社調』「大隅国之部六」、東京大学史料編纂所蔵）によると、日秀とは、高野山にて修行を積んだのち、発願して那智の海岸から補陀落渡海をこころみた真言僧である。彼はその途次、琉球・金武村の海岸に漂着し、王府の厚遇を受けながら、琉球各地の寺社仏閣の再興に従事したという。その後、琉球を離れて薩摩国坊津に到り、島津氏の庇護を得、一五五五年、坊津一条院に多宝塔を建立。また島津氏の護身僧としてその地位を高めたとされる。

【資料21】『三国名勝図絵』卷之四十・大隅国桑原郡・三光院 「日秀上人伝記」

波上山護国寺は、真言宗にて、一国の祈願所なり。上人を以て開山とす。

：琉球に今真言宗大凡二十余寺あり。皆護国寺の支派なり。護国寺は鹿  
兒府大乘院の営下なり。琉球の真言宗あるは、上人より生まれり。

前掲『三国名勝図絵』（一八四三年）所収「日秀上人伝記」には、波  
上山護国寺は日秀上人によって開かれたとされ、鹿兒島の大乗院の営下  
にあるという。しかし『坊津町郷土誌』所収「琉球国真言宗符牒」によ  
ると、那覇の護国寺が大乗院の末寺となるのは一六八八年のことで、年  
代が合わず、本来的には日秀とは直接関係がない。このことに關して、  
伊藤聡は「琉球の密教寺院全体が、薩摩の傘下にあることを強調したも  
の」<sup>(21)</sup> だとしている。このように日秀言説が薩摩で利用されているという  
事実は重い。さらに日秀は、弁財天と関わる存在でもあったことが資料  
22から理解される。

【資料22】『琉球国由来記』卷一一「波上宮護国寺」弁財天対面石（或名  
腰掛石）  
波上山門外路上、有円圍石。名対面石。昔日秀上人、七カ日毎日依、欲  
參請于弁嶽弁財天。自其次夜、弁財天垂跡、立于石上、与日秀上人、対  
面密契。又心通而來。故名其場、云対面石。（圍石者、順治子丑之年間、  
垣垣之）

この伝承によると、護国寺の外路上にあった弁財天対面石は、日秀が  
「弁嶽」の「弁財天」と密契した場所であるというのだ。根井浄は「日  
秀は薩摩時代の永祿四年（一五六二）、弟子の良源に弁財天秘法を伝授  
して」<sup>(22)</sup> いると述べるが、これは隼人町立歴史民俗資料館所蔵「日秀上人  
遺品関係資料」中にある日秀自筆「弁財天八印一明大事」を基にした指  
摘であろう。当該資料は、弟子の良源に対し、弁財天と合一するための

密教の秘法の要領を伝授したものと思われる。また日秀と弁財天との関  
連は、他の部分からも指摘できる。中世においては、「六所弁才天」と  
して天川・巖島・竹生島・箕面・背振山・江島の弁才天が著名であるが、  
特に天川は、吉野と熊野の奥の院という位置付けをもつ。さらに天川弁  
才天は弥山という修験道の宗教的權威の源泉に繋がってゆき、金峰山修  
験と大師信仰の影響を受けて成立したといわれている。<sup>(23)</sup> 日秀が、まさに  
高野山で修行を積み、熊野・那智から補陀落渡海を試みた真言僧であつ  
たとされている点を考慮すれば、そこに天川弁財天との繋がりを見いだ  
すことが容易ではないか。

このように、本来的に存した弁財天と日秀の強い繋がりは、寺社縁起  
類が成立する段階において、真言僧の関与によって増幅されたことが想  
像できる。藤田明良は「日秀が坊津に来て宝塔本尊の仏師となったのは  
決して偶然ではなく、一乗院側の意図的な人選と周到な根回しがあつた  
に違いない。さらにそれが可能となるためには、波之上護国寺をはじめ  
とする琉球の密教系寺社と一乗院の間に、（中略）人や情報が頻繁に移  
動するような宗教ネットワークの存在が考えられるのである」と述べ、  
薩摩・一乗院と琉球の真言宗世界との浅からぬ繋がりを指摘している。<sup>(24)</sup>  
一乗院との関連が深い護国寺の真言僧らが、日秀を称揚するのはごく自  
然なことであろう。またその護国寺が、日秀を起点に島津氏の祈願所で  
ある大乘院と関係をもつにいたった、という言説が『三国名勝図絵』に  
記されることは、薩摩国の真言宗世界を介して、琉球が宗教的に絡め取  
られていることを物語っているといえるのではないか。当然「弁嶽」の  
「弁財天」という認識は、波上山護国寺の僧侶たちにも共有されたもの  
であり、琉球において日秀の伝承とともに語られた可能性は十分にある  
といえるだろう。

さらに『三国名勝図絵』卷之三・鹿兒島之二「弁才天廟」項には、島

津氏の琉球侵略に際し、武将・樺山久高のもとへ護国寺の弁財天が示現し、「我を供養せば、汝を擁護すべし」と言った、という伝承が見える。この伝承は、宝永三年（一七〇六）に、弁才天女廟を移建した際の梁文に記されている、と当該本文中に指摘があることから、一七世紀末には薩摩においてすでに語られていたものと想像される。琉球を守護する神がこれを見捨て、薩摩に力を貸したというこのような語りは、薩摩の琉球支配の正当性を物語る文脈で形成されたものとみて疑い得ない。

ここに連動してあったのが、先述した羽地による政治・宗教改革である。羽地の政治手法を、彼の記した「羽地仕置」、及び『球陽』の記事から見ると、古琉球以来の宗教観や慣習を排すべきとの強い意識をもったものだったことがわかる。<sup>(25)</sup> その羽地の改革の中で見逃せないのが、開得大君をはじめとした神女および女官の地位低下である。『女官御双紙』（一七〇六）をみると、今までは琉球の王権の中で女性の最高位にあった開得大君を、「大清康熙六丁未年」（一六六七年）に王妃の次位へと降格させていることが解る。「羽地仕置」にも、行政から神女の掌る祭事を遠ざけるような改革がいくつか見られるが、この「大清康熙六丁未年」が、琉球における弁財天信仰の興隆期と連動するものであることは注意すべきであろう。

一六〇九年の島津侵入によって異国のまま幕藩体制に組み込まれ、王国としての主体性を見失い、半世紀近くも混乱した時代を送った琉球は、近世琉球期へと大きな政治・文化的転換をおこなうなかで、新しいアイデンティティーを模索した。その動きと連関するのが、琉球の守護神の、弁財天への同化・置換ではなかったか。開得大君らをはじめとする神女の地位低下と、この時代の弁財天信仰の興隆、および積極的な受容・意義付けとは、相対的なものと捉えるべきであろう。先に指摘したように、国頭正則の妻が、これらの羽地の改革と軌を一にして開得大君に就任し

ていることなども踏まえれば、このような薩摩と関連をもった政治家・士族の媒介をもって、開得大君と弁財天との繋がりが形成された可能性は否定できない。

#### おわりに

琉球への弁財天信仰そのものの流入は、熊野権現信仰が将来された一四世紀～一五世紀頃にまで遡ることが考えうる。<sup>(26)</sup> それが一七世紀初頭、混乱の世紀からの脱却を図るため、王府により着手された内部改革に上手く乗じたかたちで真言僧らが力を持ち、彼らによって琉球の基層にある開得大君の信仰を下支えしながら、日秀の事績と併せて弁財天の功德が喧伝され、この時代に思い出したかのように興隆した可能性が高いといえるだろう。さらに、王府による近世的世界への転換という要請から、弁財天は旧来の神女組織を中心とした宗教政策に組み込まれ、次第にそこに融合し、浸食したのだと思われる。このような背景を考えねば、一七世紀中葉に琉球第一の守護神＝弁財天説が、にわかに活況を呈す意味が理解されないだろう。そこではもちろん、袋中の『琉球神道記』も、そういった解釈を補強する材料として一役買っていたことが推測される。

また、祀る者（司祭者）と祀られる者（神）との同一視は普遍的に起こりうることであり、そのため天孫神とされた弁財天は、それを祀る開得大君とも同体となるのが当然考え得る。だからこそ、弁財天には航海神としての功德が付与されたと考えられるのだ。日本の船頭らが、龍槌の水を聞得大君に捧げて結願した、という発想の先に、冒頭に述べたような箕隅御嶽・硫黄城に対する船頭らの喜捨行為が生まれ、ついには祭神の弁財天への置き換え、という事態が生じたものと予想されよう。いずれにせよ、琉球における弁財天の肥大化は、その根幹として薩摩による支配という事実があつてなされたものと考えられる。王府の至聖

所に跡を垂れたのは、まさに日本からやってきた神であった、と琉球の人々自らが語ってしまうところに、その頭れを見るべきである。琉球の弁財天とは、薩摩との政治的・文化的な関係の中で、次第に増幅した存在であったと言えるのではないか。

## 注

- (1) 豊見山和行「航海守護神と海域―媽祖・観音・聞得大君」(尾本恵市ほか編『海のアジア5 越境するネットワーク』岩波書店 二〇〇一年)
- (2) 『頭役被仰付候以来日記』は、現在琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫に収蔵されている。本資料本文は、当該図書館が提供している画像から起こしたものである。
- (3) 前掲注1、豊見山(二〇〇一) 参照
- (4) 西郷信綱・外間守善校注『おもしろさうし』(日本思想大系)(岩波書店 一九七二年)「解説」による。
- (5) 真栄平房昭「近世琉球における航海と信仰―旅の儀礼を中心に」『沖縄文化』第二八巻第一号 一九九三年)、網川恵美「琉球における媽祖信仰の研究」(『立正大学 國語國文』第五〇号 二〇一二年) ほか。
- (6) 平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』第一書房 一九九〇年
- (7) 陸上自衛隊那覇駐屯地業務隊総務班長・水津士郎氏のご教示による。
- (8) 大和船頭の喜捨記事は、資料2、箕隅御嶽の由来譚にも見えているが、この伝承が初めて採録された『那覇由来記』(一七〇九)には、喜捨に関する記述は存在していない。このような伝承の変化に關しては別稿を期したい。

- (9) 山本ひろ子『異神 中世日本の秘教的世界』(平凡社 一九九八年)、真喜志瑤子「史料にみる琉球の弁才天信仰」(『南島史学』四二 一九九三年)、原田禹雄「琉球を守護する神」(『人文学報』八六 二〇〇二年) ほか。
- (10) 前掲注9、山本(一九九八) 参照
- (11) 渡辺匡二「蛇神キンマモン―浄土僧袋中の見た琉球の神々―」(季刊『文学』第9巻・第3号 岩波書店 一九九八年)
- (12) 島村幸一「琉球神道記」(古代文学講座11『靈異記・氏文・縁起』勉誠社 一九九五年)
- (13) 沖縄大百科辞典刊行事務局編『沖縄大百科事典』(沖縄タイムス社 一九八三年)の「国頭正則」項(田名真之執筆)による。
- (14) 前掲注13、田名真之の指摘による。
- (15) 池宮正治「毛起竜(識名盛命)『思出草』…翻刻と注釈」『日本東洋文化論集』(8) 琉球大学 二〇〇二年
- (16) 前掲注9、真喜志(一九九三) 参照
- (17) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店 一九八二年
- (18) 知名定寛「近世琉球仏教の二宗体制について」(島村幸一編『琉球 交差する歴史と文化』勉誠出版 二〇一四年所収)
- (19) 前掲注18、知名(二〇一四) 参照
- (20) 坊津町郷土誌編纂委員会編『坊津町郷土誌』一九六九年
- (21) 伊藤聡「渡琉僧の物語―特に日秀上人をめぐって―」(季刊『文学』第9巻・第3号 岩波書店 一九九八年)
- (22) 根井浄「補陀落僧の琉球―日秀上人を中心に―」(島村幸一編『琉球 交差する歴史と文化』勉誠出版 二〇一四年)
- (23) 前掲注9、山本(一九九八) 参照
- (24) 藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流―『一乗院来

由記』所載の海外交流記事を中心に——」（九州史学研究会『境界からみた内と外 『九州史学』創刊五〇周年記念論文集 下』岩田書院 二〇〇八年）

(25) 高良倉吉「向象賢の論理」（琉球新報社編『新・琉球史 近世編

（上）』琉球新報社 一九八九年 所収）

(26) 加地順人『沖繩の神社』（ひるぎ社 二〇〇〇年）に、琉球への権現信仰の流入に関する考察がある。

【参考文献】（発表年度順）

・真喜志瑤子「史料にみる琉球の弁才天信仰」（『南島史学』四二 一九九三年 所収）

・根井浄『補陀落渡海史』法蔵館 二〇〇二年

・原田禹雄「琉球を守護する神」（『人文学報』八六 二〇〇二年 所収）

・知名定寛『琉球仏教史の研究』榕樹書林 二〇〇八年

・島村幸一編『琉球 交差する歴史と文化』勉誠出版 二〇一四年

【本文引用】

・『琉球神道記』：伊藤聡・原克昭・渡辺匡一『琉球神道記』巻五注解

（池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまなざし』三弥井書店 二〇一〇年 所収）

・『おもしろさうし』：西郷信綱・外間守善校注『おもしろさうし』（日本思想大系）岩波書店 一九七二年

・『中山世鑑』：横山重他編『琉球史料叢書』東京美術 一九七二年

・『女官御双紙』、『御嶽由来記』、『君南風由来并位階且公事』、『八重山嶽々由来記』、『八社縁起由来』：小島環礼校注『神道大系 神社編五

十二 沖繩』神道大系編纂会 一九八二年

・『琉球国由来記』：外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』角川書店 一九九七年

・『球陽』：球陽研究会編『球陽』（沖繩文化史料集成5 角川書店 一九七四年）

・『遺老説伝』：嘉手納宗徳編『球陽外巻 遺老説伝』（沖繩文化史料集成6 角川書店 一九七八年）

・『三国名勝図絵』：原口虎雄監修『三国名勝図絵』青潮社 一九八二年

・冊封使録類：黄潤華・薛英編『國家圖書館藏琉球資料彙編』（上・中・下）北京圖書館出版社 二〇〇〇年／殷夢霞・賈貴榮・王冠『國家圖書館藏琉球資料續』（上・下）北京圖書館出版社 二〇〇二年

（明治大学兼任講師）